

今後の公演他予定

五月廿四日(土) 十六時より
軽井沢・鶴間邸

第一回 薊の会

新緑の軽井沢に憩う

唄と語りの方

松尾芭蕉 奥の細道

谷崎潤一郎「月と狂言師」より

新内小唄 にこりえ

創作曲 幻のお三重

地唄 「歌行燈」より

朗読 ゆき

寺田 農

西松 布咏

七月四日(金) 六時半開場

七時開演

四谷・紀尾井ホール

第二回 純の会

森本純女一門 舞の会

万歳・菊の露・小簾の戸・

名護屋帯・ゆき

尺八

宮崎 青畝

西松 布咏

八月三日(日) 三時より
岐阜・かわらや

第一回 粹艶会

浴衣ざらひ
演奏会および親睦の夕べ

九月廿七日(土) 十二時より
赤坂・泉クラブ

第三十六回 美紗の会のつどい

美紗の会一門演奏会と親睦の夕べ

たより第59号目次

新会長挨拶

花の季によせて

「春を味わわ」

「この糸

「粹艶会」に参加して

《岐阜だより》

粹なお江戸ちゃんちうれん

小高 忠雄

西松 布咏

和光 貴俊

磯部 英子

本郷 公基

新会長挨拶

小高 忠雄

(己紗 忠咏)

去る三月十五日に「第三十五回美紗の会のつどい」が開催されました。

この日は、春の萌しを感じられる暖かで穏やかな気持ちの良い一日でありました。

会場はいつもと違って本郷会長の娘婿さんが経営する横浜中華街の老舗・華勝楼の二階の大広間で行われました。通りのにぎやかな雰囲気よそに演奏会は加藤さんの軽やかな名調子の司会に乗って、金屏風を背に若手連による「白扇」を皮切りにスムーズに進行し、緊張の中にも和やかな雰囲気の中に終えることが出来ました。

その後、宴会にうつり本郷会長の最後の挨拶があり、かねてより師匠から依頼されておりました次期会長に私が就任することになりました。

顧みますと私も美紗の会に入会して三十年の歳月が流れております。今までに色々なことがありましたが、この三十年の歳月がこんな短く感じたことはありません。

これから会長として私にできますことは師匠と共に進めていくつもりです。今後とも会員の皆様におかれましては、ご協力、ご援助、ご助言を賜りますようお願い申し上げます。あわせて、美紗の会が益々発展しますように微力ではありますが、皆様と共に頑張っていく所存でございますので、よろしく願います。

花の季によせて

西松 布咏

去年は「ゆき」に降り込められたが、

ようやく思いの糸が解け、新たな年も瞬く間に時が過ぎ、気がつけば早や花の季になっていた。今年こそ「花も雪も払えば清き袂かな」のように穏やかな心境で花見をしたいと桜だよりに浮き足だつていたら三月十九日に閉崎ひで女師 同月二十三日に滝口悟氏と訃報が続いた。兩人とも大切な心の師であった。

ひで女師は石川譚月師の稽古場でお会いし爾来三十年の付き合いである。「布咏さんの色っぽくない唄い方が好き!」と国立劇場での富本おさらひ会の相方を選んで下さったり、毎年主宰なさる地唄舞の会「華の会」に「これで勉強して舞台で弟子の地方をしてね!」と駒香さんの上方唄「六歌仙・柳々」のテープを渡され、ときどきしながら必死で唄ったことがある。その唄声を楽屋で聞いていらし



た西松文一師が「この声は誰だい？」と仰りそれがご縁で地唄を伝授いただくことになり、まことに結びの神様！

その後ますますひで女師との結びつきも強くなりニューヨークのジャパソサエティ公演から始まりベルリン・パリ・ロンドン・クフモ・コペンハーゲンと海外公演には必ず同行させていただき地唄に対する思いが深まっていった。

ひで女師は幼ない頃から日本舞踊を多くの師から学んだが、ジャンルを問わず美しいもの、優れたものに出会うとたちまち惹かれ音楽もクラシック、ジャズ、シャンソンと造詣が深く、モダンバレエのレッスンも始めたがある時——鏡の中の我が姿を見たとき、どんなに逆立ちしても外人のすらりとした容姿にはかなわないときっぱりあきらめて地唄舞の世界に入ったと冗談まじりに仰ったことがある。そんなところも私の気性と合ってやがて週に一度、三味線をお教えに伺うようになり稽古の

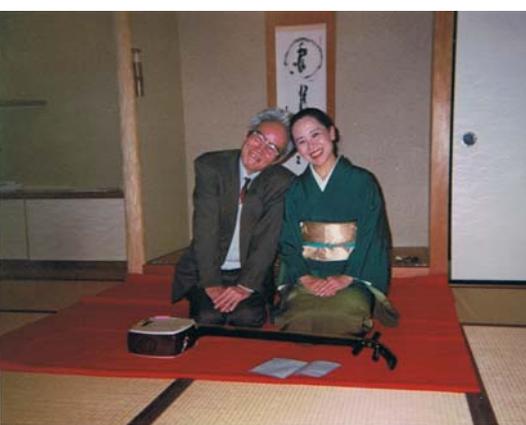


後に好物のコーヒーを飲みながら様々に語りあった。

「地唄舞は歌舞伎舞踊や能狂言のように確固たる形がないだけに舞の内面や心象風景を自分の筆で描くことが出来、年齢と共に洗ひ張りが出来る面白さと深さがあるのよ」と仰り、ある年齢から毎年『ゆき』を舞う決心をし、必ず私に唄わせて下さった。舞は凜とした品格がなければと、優れた美的センスを發揮された洗ひ衣装による配色の妙が背景に映え、その舞台は溜息がでる夢幻の世界となった。「舞姿は腰から下の裾さばきが大事な」と帯の下の腰紐を極限まできつく絞り「不自由なからだからこそ美の工夫が生まれてくるのよ」と繰返し仰っていた。

私生活のことは多くは語らなかつたが、一度だけバス停で立ち話をした時に「私も長くお付き合いしているひとがいるけれど、その方の立場を尊重しなければならぬの…」と遠くを見つめていたお顔が忘れられない。決して言い訳をしないきっぱりとしたお人柄だった。

平成三年の桜がほころぶ四月十日に日立のシビックホールで『花の季』公演にひで女師と出演した時に市役所の広報担当の滝口悟氏と知り合った。



能力などのあらゆる分野の研究や独特の持論を展開していったがその人柄は誰からも慕われ市役所の名物男たる存在だった。そればかりでなく夏目漱石の弟子の松根東洋城主宰の俳句誌『淡柿』の同人で何度も受賞する程の俳人であった。

いつしか私の唄をこよなく愛して下さり「江戸情緒のタベ」を色々な場で企画し、多くの人々を私に会わす手引きや、私の主催するあらゆる会に日立から駆けつけて下さった。時折、唄心を磨くようにと豆粒のような丸い文字で「恋文」を下さりへ寒紅や少しすつ老い稀に逢いへ夜桜に不倫の闇の在りしかなへ麻耶夫人花芯の香かな蓮ひらき」と言った意味深な句を寄せて下さり、ひととき唄心とはかくも切なく苦しいものかな。とその深さに恐れ入ったものだった。なかでも「死も生も恋も一文

字亀鳴けりぐが心に残ったが亡くなった今、又しみじみこの一文字が胸に迫ってくる。

ひで女師は舞にその一文字を懸けて旅立たれた。

私はその一文字を唄に。果たして出来るだろうか…

ふたひらの桜が瞬く間に散ってしまつた虚空にふとつぶやいてみる花の季である。

「春を味わふ」

和光 貴俊

桜の蕾がひとつ、ふたつとほころびはじめた三月二十一日(土)、浅草にある老舗、「茶寮一松」で、「春を味わふ」という江戸情緒溢れる会が催されました。二月の末に、布詠師匠からご案内を頂くやいなや、無類の落語好き且つ、師匠の大ファンである私にとっては、まさに「猫に鯉節」のような企画とばかりに、いそいそと予約をさせて頂き、楽しみにしておりました。

布詠師匠と私の出会いは、二年半前の冬に遡ります。私の所属する、「三菱商事」という無粋の塊の様な総合商社と、「リクルート」という、これまた世知辛い(失礼!)企業が、これまでのような欧米流の理屈一辺倒の研修でなく、企業の枠を超えて「日本」というものについてもう一

度、じつくりと感じ、学び、考え、議論する場を作りたい、という思いで、編集工学研究所の松岡正剛所長にお願いでスタートしたのが、「ハイパー・コーポレート・ユニバーシティ」でした。副題として「問」というテーマを持つこの会合は、毎回、ユニークなゲスト講師を招いて、生徒たちとの真剣なやりとりがなされるのがひとつの特徴なのですが、記念すべき最初の「合宿」に颯爽とあらわれたのが布詠師匠でした。そのチャージングな外見と声に似合わず、スパルタな授業がすぐさまスタートし、最初の晩は「はじめより」を皆で稽古、翌日は、お三味線で「さくらさくら」の猛特訓と、とても企業研修とは思えぬプログラムでの衝撃的な出会いでありました。ちなみに、その合宿の夜半を過ぎてからの特別パフォーマンスは、大倉正之助さんの鼓と布詠師匠の唄と三味線、という贅沢なものでした。それ以来、個人的にも何度か、布詠師匠主宰の会で、唄に聞き惚れる機会があり、また、僭越ながら、私の大好きな故古亭志ん朝師匠が「のびあたり」を一節、口ずかす落語「唐加子屋政談」のCDを差し上げたりにして、ひと時なりとも憂き世を忘れる機会をたびたび頂戴して参りました。

今回の「春を味わふ」は、男前でも有名な桂扇生師匠の「花見の仇討ち」という季節らしい断でスタートし、布詠師匠も、「並木駒形」や「花は上野」といった小唄や端唄、さらには、ちょっと珍しい相撲甚句を取り入れた「勝名のり」など、私のような素人にも、また玄人にとってもたまらないであろう粋な選曲で会が進み、部屋の中に柔らかな霞がかかったような雰囲気や皆で楽しんでおりました。ただ、そこは布詠師匠のこと、最後に新内の「籠釣瓶」という男女の深情けの恐ろしさすら感じさせる、花冷えのような唄をもってきて、うーん、とうならせて終わる、という、これまた一筋縄ではいかない演出で、能天気なままでは帰らせない、師匠の「なぞ掛け」を感じた会となりました。若輩ものゆえ、とれだけ、この会の素晴らしさをお伝えできたか甚だ心許ないですが、とにかく、いつもの師匠の会と同様、えもいわれぬ「浮遊感」のある、素敵な会であったことをお伝えして、私の駄文をおわらせて頂きます。師匠、今年こそ本当に白金のお稽古場に伺います！

じじいの糸

磯部 英子

暑い夏が終わろうとしていた。飲み残したワインの壘底に溜まった澱のような赤黒いものが、心の中心に増し続けていた。古代文字をモチーフに「書」表現をしている私は、

昨年の夏得体の知れないその赤黒いものを抱え、毎年正月に催されている書道展に向け大作を制作していた。崩れそうな気持ち振り切るように仕上げたものの、怪しげな心の中のものが消えることはなかった。あたりまえのような初秋の風が通り過ぎ、都会の街路樹も赤や黄に染まる季節を迎える頃だった。

一本の不思議な糸が、私の目の前に現れた。まるで「虹の彼方」の少女のように、突然の竜巻に運ばれてしまったかのようだった。その時私は、布詠師匠が唄うその中にわが身が洗い流される心の糸を見た。

入門させていたきたいものの「本当にお遊びでもよろしいのでしょうか？」と三回は念を押した気がする。そして迎えた初舞台！

入門してすぐのことであるで想像することが出来ない「美紗の会のこと」だった。私の何かが大きくギアチェンジする予感があった。

終始 会は暖かく、さらに暖かい皆様の応援により「初めより・行きに寄ろうか」「有明」を唄い、無事に美紗の会デビューすることが出来た。したことを深く感謝をいたします。心地良い疲れと共に帰路に着く電車に揺られながら、私はもう五月に開催される小作品展に向けて作品のデッサンをしていた。

『慈』いつくしむ——それぞれの個性溢れる様々な糸、それをしっかりと受けとめ、鍛えるようにあるいは試

すようにそれを自らの糸に重ね、そして再び紡ぎながら、完成度を高めてゆく——それが布詠師匠の凛とした生き方なのだ。と深く感じ入り、心を熱くして筆を執った。「良いものが書けるわよ！」と声を掛け入門を勧めて下さったぶどうの樹の康枝さん。貴女のさりげない一言は私をすっかりその気にさせてしまう魔法のパワーを秘めています。有難う！師匠、そして諸先輩の皆様、どうぞ末長くお付き合い下さりご指導ご鞭撻の程よろしく願います。

「粋艶会」に参加して

本郷 公基

去る二月三日—そう今年初めて東京に雪が積もった日—岐阜の今町の「かわらや」で、西松布詠師匠が昨年縁あって指導されるようになった「江戸小唄粋艶会」の「第一回唄い初め新年会」が開催された。美紗の会から師匠以下二人の名取、岡崎（一唄）さんと小高忠詠さん及び実力派の山中さんそして会長の私が協賛・出席した。

この日、東京・横浜・鎌倉は十センチ以上の積雪で長靴を履いて参加した仲間もいたのに、小田原辺りからは雪は殆ど溶けており、寒いと思われた岐阜近辺には積雪もなく思っ

たより温暖であった。岐阜は、昨年四月に師匠の「たか田八祥」での『春を味わふ』公演にお供した時と今回で二度訪れているが、七十一年間のわが人生でそれまで無縁の土地であった。前回訪れたときは、岐阜現代陶芸美術館や織部の里を訪ねたので、私には「陶芸のまち」という印象が強かった。今回、新幹線「ひかり」を名古屋で降りて大垣行きに乗り換え、岡崎や清洲などの駅を通り過ぎて岐阜に着く間、「そうか、この地は日本の歴史の中でも大きな足跡を残した三大英雄、信長・秀吉・家康の出身地なのだ」と認識を新たにした。



たにした。

三時、唄い初めは三絃師の原信行さんの司会で始まった。美紗の会と異なり、女性の出演者は一人で後は全部男性。しかもおそろいの着物を上手に着こなした熟年の紳士が殆どである(衆議院議員の野田聖子代議士も会員だそうだが、今回は欠席された。)最初から貴塚ある人たちが登場し、音程も確かな上に邦楽の声になっている。この会は出来て十数年だそうだが、皆さんなかなかお上手だなと感心した。終了後の懇親会で、会員の皆さんと言葉を交わしたが、会員は企業経営者や「かわらや」の社長はじめお店の経営者ばかりで、言わばロータリー倶楽部の小唄の会みたいなものだと理解した。

これで東京から参加した美紗の会の四名が貴塚負けしてしくじっては師匠に恥じをかかせることになる、われわれは内心緊張していた。前半の部(捨て番の終わりが近づき、隣にいる山崎さんを見ると、やや緊張気味に番組を見ている。番組の演目には「嘘とまこと」と書いてあるが、本人は「嘘のかたまり」を唄うつもりであったから慌てている。「ミスプリントと断って唄いなさい」と励ました。山中さんは、美紗の会の発表会同様、落着いて持ち前の美声で見事に「嘘のかたまり」と「蜷川を唄い終えた。彼女のおかげで、捨て番の最後に登場した私も落着いて「有明」と「博多節」を精一杯唄うことが出来た。

休憩でお酒などを飲んだ後、本番は

私の好きな「四条の橋」、「浜町河岸」、「山中時雨」、「浅間のけむり」等が続いた後、岡崎さんの出番である。「一咏津絵」と「二上り新内」を唄いこなされた。よしと思うと次は、わが美紗の会のエース小高さんの登場である。忠歌さんチョッと緊張気味なので、こちらも緊張して聴いていたが、あの高い美声が部屋の隅々まで響き渡るように見事に「櫓下」と「呼子の女」を唄い上げ、拍手喝采を浴びて終えられた。

本番の取りは、当然のことながら、師匠の弾き唄いである。「春風がそよそよ」と「玉川」をいつもの美声で参加者全員を魅惑され、ここでも西松布詠師を師匠にもつ幸せを感じつつ千秋楽となった。

《岐阜だより》

粋なお江戸ちんちりれん

岐阜・粋艶会のメンバーである山口街香さんの店『シヨナサン』の一周年記念コンサートが四月五、六日の二夜にわたりの開催された。

世話人原信行氏の名司会で幕が開き、一部は藤本秀克丞師の糸・街香ママの唄で賑やかに「夜桜や」で始まり、たより姐さん・ゆう子姐さんのおでやかな踊りと共に「やなぎの雨」「二上り新内」でしつとりとお座敷芸を。二部は街香さんが新内小唄「籠釣瓶」を唄い、

西松布詠が解説を交えながら吉原情緒たつぷりに「桜見よとて」「蘭蝶」「今朝の雨」「箕輪心中」を弾き唄いした。

清元。端唄。小唄。と芸熱心な街香さんの思いが桜満開の夜に花開き深夜まで楽しい春のつどいとなった。



たより第50号

発行者 美紗の会
編集責任者 大久保 朋子

■美紗の会

主宰 西松 布詠

稽古場 港区白金台三二二一
白金台ブレイス三階
電話 (三四四一)二七二六
(五四四七)二四二二

http://www.17.ocn.ne.jp/~misa5/